

雪山大作戦

この実践は、「子どもたちが、気温や気象の状況で変わる雪の性質を感じ取り、試行錯誤しながら仲間と協同して困難を解消し、雪山の特性を生かしたダイナミックな活動に展開した事例」です。地域の方の協力、異年齢の友達への発信など、人との関わりが深まる環境の工夫が、主題につながる子どもたちの体験を広げたり深めたりしています。長きにわたり根づいた地域の特性を生かした保育を積み重ねてきたことが伝わってきます。

札幌市立もいわ幼稚園

3～5歳児



数年前から、地域の建設会社の方が、園庭に雪山を造ってくれている。自分たちで造った雪山に物足りなさを感じ始めた5歳児は、「大きな雪山を造ってください。カエデの木の半分の高さに作ってください」と、建設会社をお願いしに行った。重機とダンプカーが来た日は、預かり保育で来ていた子ども3人が雪山作りの様子を終始見ていた。担任は、雪山を造る様子を他の友達にも伝えたいとの思いを受け止め、一緒に写真を用いたお知らせを作った。3人は、作業の様子のお知らせを見せて、「滑って見たら、ジェットコースターみたいだったよ！」などと園のみんなに説明した。その後、子どもたちは、ソリを持って雪山に上り、一人一人が滑って確かめていた。「本当だ、よく滑る！」と実感する。



場面 1. 雪山が滑らない

<1月中旬>

滑らないことに気づく



滑る様にするために



曲がる原因を探る

- ・翌々日、20cm程の降雪がある。「俺たちの山、今日は滑らない」「大変だ、どうにかしなくちゃ」「昨日みたいに滑るようにするぞ」
- ・「こんなに雪があつたら滑らない」と、気づいたAさんがミニダンプ（ハンディー）を取りに行った。下から雪を集めて山の上に登り、後ろの崖に捨て始める。一人が始めると、みんな大急ぎで、ダンプやシャベルなど自分の使いやすい用具を使って、黙々と除雪を繰り返した。
- ・途中でBさんが、「1回滑ってみて」と友達に言うと、友達が滑りを試す。滑りを確かめ、曲がった所に雪を足したり、できるだけ平らにしたりして斜面を真っすぐ滑るまで試しながら除雪を繰り返した。Cさんが、「山の下の歩けなくなっている」と気づき、「今度は道を作ろう」と言って、道を作った。
- ・除雪後、友達や4歳児に、「滑るようになったよ」などとお礼を言われ、子どもたちは満面の笑み浮かべる。

場面 2. 「心も身体も思い切り動かして雪で遊ぼう！」

<1月下旬～>



雪質による違いを感じる



気温や雪面の状態などで違う滑り具合を試す

- ・雪山の裏の急な絶壁には、あえて足を掛ける場所は作っていない。保育者が登る様子を見て、子どもたちも登りたい一心で雪山に登ることに挑戦する。
- ・最初は、手足の置く位置が分からず、手で支えられない、踏ん張りがきかないことなどから、何度もずり落ちる。そのうちに、登ることができる子どもがいて、その登る様子から、足や手の位置を真似して登った。何度も、粘り強く挑戦する姿が見られた。友達と協力して成功する子どももできた。その後も何度も挑戦して、できるようになっていた。
- ・冬の期間の雪山は、毎日雪面の状況が変わるが、新雪のあった日は登りやすく、冷え込んでツルツルの雪面では、氷の斜面となかなか登れないことを経験する。また、斜面では、米袋で作った手作りソリやプラスチックのソリ、数人が乗れるひも付きの特製「まほうのじゅうたん」など、様々な遊具で試して滑る。
- ・毎日、気温や気象の状況、雪面の状況によって滑り具合が違うことにも次第に気づき、友達と知らせ合って、遊ぶことを楽しんだ。

場面 3. 工夫して遊ぼう～オリンピックごっこ～

<2月>



斜面を滑り降りる工夫

- ・ソリ滑りも、次第により速さや距離を求めて取り組むようになり、Dさんが、プラスチックのソリに立ち乗り滑りを始めた（斜面の状況から、安全に滑ることができるように配慮している）。
- ・この時期は、ピョンチャン冬季オリンピックが行われていた。日本の選手が大活躍する度に、子どもたちもあこがれをもって遊びに必要な物を作り、遊びが繰り返された。雪山の周りを走って回る「スピードスケート」、プラスチックソリに立ち乗りをして、斜面を滑り降りる「スノーボード」など遊び方を工夫する姿が出てきた。

- ・腰や膝を曲げてバランスを取り、少しずつ滑る距離を伸ばしていく。繰り返し挑戦するうちに、坂の中腹（斜面）から滑ることができるようになり、競って滑った。オリンピックのスノーボードの競技ごっことなり、5歳児が金銀銅のメダルを用意した。友達が応援する中で滑っていた。

場面 4. 「雪を解かすには」

<4月上旬>



雪→氷の変化を感じる



雪を解かす方法を試す

- ・始業式の後、例年より雪解けが早く、園庭の雪山以外は全て解けてしまった。子どもたちは、早速、ソリを持って滑りに行く。「凸凹で、滑らないね」と、以前と違うことに気がつく。「明日から入園する子たちがいるから、転んで怪我をすることもかもしれない、雪山を崩すといいね」という話になる。早速、幼児用のプラスチックシャベルで掘り始めるが、硬くて全く歯が立たない。
- ・子どもたちに、「大人の力も借りなきゃ」と言われ、大人も駆り出されるが、かなりの力がある。子どもたちは、表面が真っ黒の雪山の中は氷の塊で相当硬い、と掘っていて分かった。しばらくして、「雪を解かすには、水をかけるといいんだ!」と、雪解けの泥水をバケツに集めて、自分たちの掘った穴に入れ始める。「ほうらね」と、少し解ける様子を確認している。水を集めて入れる子どももいれば、本当に解けるかをジッと見ている子どももいた。

場面 5. 「雪山トンネル」

<4月中旬>



見通しをもつ



雪穴に対応して動く



雪→氷の変化を楽しむ

- ・雪山のあちらこちらに穴がたくさんできた。隣の穴とつなげようと掘り進む。向こう側に光が見えてくると、つながるかもしれないと見通しをもって遊ぶ姿が見られた。トンネルがつながった瞬間に子どもは、「穴がつながった。トンネルできた!」と歓声をあげて、喜びを友達と分かち合った。
- ・どっちの方向に掘ると穴がつながるのかを考えて、掘り始めるなど、遊びの中で何度も繰り返すことで、見通しが鋭くなっていった。また、トンネルをくぐるために、体をいろいろ動かしながら試すなど、体の感覚や動きなども自然と感じながら遊んでいた。また、その様子を他のクラスの子どもたちが見て、同じようにくぐるなど、人との関わりを通じて雪山への関わり方も広がる姿が見られた。
- ・雪山を掘り進むと、中から天然の氷が出てきて、「宝石がたくさんだ」と喜ぶ子どもがいた。輝きも美しく、宝石に見立ててバケツに集めたり、お玉などで氷を崩していくことで、少しずつ解けていく様子を見たりと、変化を楽しむ姿が見られた。
- ・4歳児は、砂や土に雪解け水や雪氷を混ぜて、ごちそう作りやかき氷作りになり、保育者とのやり取りを喜び、安心して遊ぶ様子につながった。氷を触ってみると冷たいことを感じたり、日差しが強いところは、雪解け水も温かくなっている様子が気づいたりする子どもも見られた。

【考察】 雪山での遊びは、子どもたちの様々な力や心を引き出してくれた。

- ・子どもたちと建設会社の方との直接的な関わりにより、自分たちで雪山を大切にしようとする思いが一層強くなり、主体的に行動する姿につながった。そして、「自分たちの雪山」としての思いは、園全体に広がり、雪山で遊ぶ時には、例年以上に体を存分に動かして雪遊びを満喫する姿が見られ、子どもたちの自信にもつながった。また、地域の方への感謝の気持ちを育むことを大切にすることで、いろいろな人の力を借りながらも、自分たちでその環境を生かし、主体的に遊ぶ姿につながった。
- ・季節の移り変わりを感じ、雪解けの変化や水に変わる様子、冷たさ、温かさなど様々な心地よい感覚が味わえる、楽しい遊びとして、子どもたちに残った。また、気温による雪質の変化など、感覚・感性を発揮し、体で感じ取ったことを生かして遊びを創り出していった。
- ・冬から春の季節の移り変わり、様々な変化を感じながら遊び切ることができた経験は、次の雪遊びにつながっていくことだろう。
- ・雪山での活動は、挑戦意欲はもちろん、全身を使うことや手や足を踏ん張って登ったり、滑ったり、転がったり、力加減やバランスを工夫するなど、様々な全身運動を遊びの中で自然に体験するとともに、子どもたち一人一人の体作りにもつながった。